

日清・日露戦争以来、独自の非戦思想を展開した  
群馬県甘楽教会牧師・住谷天来が  
軍国主義の時代、官憲の弾圧下に刊行しつづけた  
幻のキリスト教雑誌の復刻版

# 聖化

せいか・復刻版  
全2巻・別冊1

本体揃価格  
39,000円

不二出版

一九二七(昭和二年)一月→一九二九(昭和四年)六月

# 住谷天来 — その独自の

## 非戦・平和思想を體現した雑誌『聖化』

本誌は群馬県の牧師・住谷天来が一九二七(昭和二年)に創刊し、一九三九年、警察の命令によって廃刊を余儀なくされるまでの一二年間、軍国主義の時代に刊行されたキリスト教雑誌である。天来はその若き日には廃娼運動にかかり、全国廃娼同盟青年会へ参加し、日清戦争の頃から平和・非戦を標榜し、日露戦争の際には、戦争に反対した内村鑑三や柏木義門、堺利彦、幸徳秋水らと同じ時期に墨子思想とキリスト教思想をもって非戦主義を唱えたひとである。本誌が、天来の赴任先の群馬県甘楽教会から発行されたのは、まさに「昭和」の始まりの時期、日中戦争・第二次世界大戦に突入してゆく軍国主義の時代のただ中であつた。天来は日清戦争以来の非戦・平和の思想を、この小雑誌発行のなかで結実させてゆく。

『聖化』は、信仰の自由はもとより表現自由もまったく困難な時代に批判的精神に満ちた人間尊重の思想にもとづき、非戦平和・国民の自覚的行動・精神の自由を唱えた希有の雑誌である。しばしば発売禁止や検閲などの処分を受けながら、天来は最後まで筆を曲げることのないまま廃刊の日を迎え、敗戦まぎわの一九四四年、窮乏の内に没する。

同時代人には『上毛教界月報』を刊行していた柏木義門がおり、義門もまた天来の思想を高く評価していた。同じくキリスト者で個人誌『嘉信』を発行していた矢内原忠雄も『聖化』の廃刊の報に接したとき

「住谷先生よく戦つて下さいました。『聖化』の廃刊は妥協による続刊よりも真理の爲に大なる証明をなした」と『嘉信』誌上に書き記した。戦時下の数少ない抵抗の記録として、またキリスト教史・近代思想史研究には欠かせない重要資料として、全一四九号を復刻し諸家に呈するものである。

### ◎住谷天来関連年表

幼名は八朔(弥作)	一八六九年
(明治2)	
前橋の幽谷塾で英語・漢文を学ぶ	一八八五年
前橋英学校教師竹越与三郎と出会う	一八八六年
この頃上毛青年聯合会を組織	
湯浅治郎らと廃娼運動を展開	
前橋教会にて受洗	一八八八年
早稲田の政治学科に入学する	一八九〇年
一ヶ月後慶応義塾に転学	
同塾を卒業	一八九一年
大磯で姉と看護中	
水の事故で両耳を患い、聾者となる	
群馬県議会で全国初めての廃娼決議	一八九三年
この頃一旦帰郷	
東京へ転居	一八九七年
服部みつと結婚	
柏木義門、『上毛教界月報』発刊	一八九八年
カーライル著『英雄崇拜論』を翻訳出版	一九〇〇年
『上毛教界月報』『聖書之研究』にて	
『聖書之研究』記者及び	一九〇三年
『聖書之研究』の常連寄稿者として活躍	
この頃『万朝報』記者及び	
日露戦争	一九〇四年
非戦論を主張しつづける	一九〇五年
婦郷	一九一〇年
天来と改名	
伊勢崎教会牧師に就任	一九一一年
『孔子及孔子教』を著わし、鋭い儒教批判を展開	一九一二年
富岡市の甘楽教会牧師に就任	一九一八年
妻みつ病死	一九二二年
伊達朝江と再婚	一九二三年
『聖化』発刊	一九二七年
内村鑑三を見舞う(翌年内村昇天)	一九三〇年
満州事変	一九三一年
甘楽教会辞任	一九三四年
居を高崎に移す	
蘆溝橋事件	一九三七年
『聖化』廃刊	一九三九年
伊勢崎の友人に時局批判の詩を送る	一九四〇年
太平洋戦争開戦	一九四一年
昇天。享年七十四歳	一九四四年
日本敗戦	一九四五年
生家近くの利根川畔に天来の顕彰碑建立	一九八一年

内容見本 第八三三号(一九三三年一月五日) ← 第一四九号(一九三九年六月五日) ↓

### 曠野に立ちて

天来

天外無宿の浪人も、この秋は仲々多忙で在つた。西に東に奔走し、名山大川を跋渉し、あらゆる人とあらゆる物とも應接し來つて、内に言ふべからざる無限の感興が湧いてゐるが、それにしても杜市

の秋興の一首こそ大に我心を得たものである。曰

玉露は凋傷す楓樹の林  
巫山巫峽氣は蕭森  
江間の波浪は天を兼ねて湧き  
塞上の風雲は地に接して陰る

この國家非常時に際して、此詩を吟ずるもの誰か、かの美はしき香高き蕤菊に對して一掬の涙なきものがあろうぞ。

國難は百出して之を開決するの途なく人材は缺乏して一代の指導者たる俊傑の士なく、僅に信頼を寄せた二三子すらも

秋風落葉の候と共に一人逝り二人逝り、残るは碌々たる斗量掃箒の凡倉のみである。危機は雷霆を孕んである。

就中全國に満ち充つる不安と不幸は先づ大体に於て二つである。一は内憂と二は外患のそれである。

内憂の方からいへば先づ第一が政黨の墮落と議會政治の腐敗であらう、次には綱紀の紊亂と風教の衰退であり、三には農村の疲弊と財政の窮迫であり、四には國家的精神の稀薄と國民的特長の消滅である。五には思想界の動搖と之を指導す

### 今日の教會

特別寄書

### 曠野に立ちて

天来

何故の廢刊なりや？  
請ひ問ふ 不得已事情なるからず。  
答て曰ふ 其事情とは何ぞ？  
然らば問ふ 其事情とは何ぞ？  
答て曰ふ 其事情とは何ぞ？

流石は官權であり、偉いものです。夫セント高飛車に構へて此の如く問ひ詰めました。開處で私は愕然とせしやうか？

ある、否、それが映片、其意を解せ。

### 廢刊之辭

天来

請ひ問ふ 何故の廢刊なりや？  
答て曰ふ 不得已事情なるからず。  
然らば問ふ 其事情とは何ぞ？  
答て曰ふ 其事情とは何ぞ？

若しも貴官の言ふ如く全然「下らぬ」であるならば、斯んな上州の片田舎で、發行する微々たる雑誌を北は北海道より南は九州から南洋まで、東は海を越えて米國に行き、西は朝鮮北支まで居るに於て「天道無親、唯徳是與」といふやうな、下から見ると、其聲

唯だ黙々として居る。唯だ黙々として居る。唯だ黙々として居る。唯だ黙々として居る。

### 化

天来

彼が「聖化」に對していろいろの詰問を發して、私が其前に出て一掃するや、彼は驚

それから本誌を卓上に置いて、何を必

# 住谷天来の真姿を知る

杉井六郎

大正期から昭和初期にかけて、両毛の地方伝道にたずさわる教師群像のなかで、安中の柏木義円と甘楽の住谷天来の二人は、まさに、兄たり難く、弟たり難い両星といつてよい。

住谷は『上毛教界月報』に、しばしばその豊かな文藻と思藻の溢れるばかりの筆をふるい、「天頭の禿た真面目の先生」、柏木に力をあわせ、ともに志操を高めることにつとめた。

『聖化』は、まさに昭和の草創、一九二七年一月十日から発行される甘楽教会の月刊の教報である。編輯兼発行人は住谷天来、印刷人は妻の朝江であり、夫婦共同の営みの産物である。そこには「神来の氣呵に駆られ」て、「奮然として大勢に反抗」する「天来」の畢生の警告も表白されている。住谷が「純化」し、「聖化」すべきだとする対象は、沈滞し、低迷、俗化、醜化する国家、社会にある。「迷信と偶像打破」(第二一―二四号)のなかで看過できないのは、筆鋒鋭く、舌端きびしく、田中義一内閣の三土忠造大蔵大臣、鈴木喜三郎内務大臣、小川平吉鉄道大臣の愚を責め、政界に瀾漫した一世の迷蒙を闡くことが、刻下の急務であると説く。この胡椒は粒こそ小さいがきわめて辛い。

由来、住谷天来については、その牧会以前の諸著作については、これを渉獵することができ、かつ、『上毛教界月報』誌上の諸論策、随筆については、

これに接する便宜が与えられている。しかし、甘楽教会の牧師としての日々と、「静寂」をつんざくような痛烈な訴えは、二、三の「聖化」を見るだけで、その生の声、その逐一に接することができなかった。不二出版による、この一地方教会の「ささめ」と、『聖化』の復刻の試みは、この残炎のきびしい世相に、待望される辛味の利いた「無絃琴」の涼風であろう。

(すぎい・むつろう)

京都女子大学教授



天来と妻・朝江

## 新島襄、内村鑑三、 柏木義円そして住谷天来

鈴木範久

住谷天来により『聖化』という雑誌が発行されていたことは前々から知っていた。日本の軍国主義の靴音がにわかには高まる時期に、するどい筆鋒でこれを批判した話を聞き、対面する機会を渴望していたが、その日は容易におとずれなかった。身近の図書館などで所蔵しているところがなかったからだ。『聖化』は文字どおり幻の雑誌となった。

対面できないとわかると、かえって見たい思いがつのるのは相手人間ばかりではない。うずうずしていたところ、はからずも門奈氏によって『聖化』に接する機会を与えられた。数年前のことである。一読して待ち望んでいた気持は少しも裏切られなかった。これまで上州に縁の深いキリスト者というと、新島襄、内村鑑三、柏木義円の三人があげられてきた。この三人は、キリスト者としてのみならず近代日本を代表する

人物といつてよい。ところが『聖化』に接した今、三人だけでなく、どうしても天来をくわえて四人にしなければならぬことを強く感じた。

『聖化』にくらべ、天来の『黙庵詩鈔』という漢詩の本だけは、かなり早くから所持していた。ふつう漢詩を好む人というと、どこか保守的なイメージがある。漢詩とキリスト教と反軍国主義は、一見、奇妙なとりあわせである。しかし重みのある思想という感じもする。今回の『聖化』の復刻により、そんな思想の解明されることを思うと実に楽しい。

(すすき・のりひさ 立教大学教授)

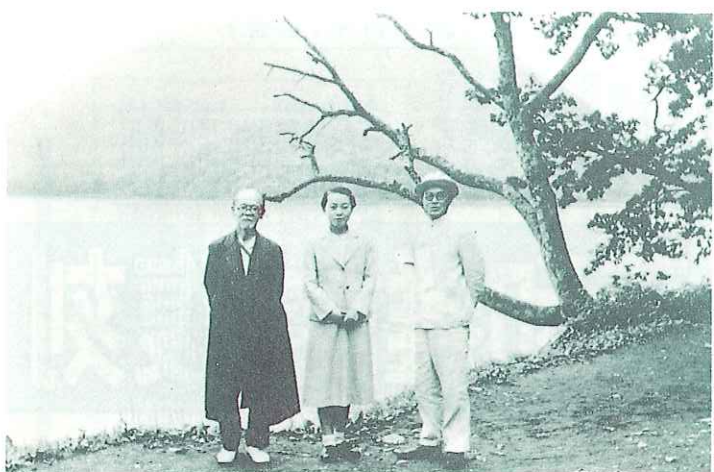
## 軍国主義時代の憂国警世の雑誌

萩原 進

偉大なキリスト者としての住谷天来の生涯において最も高く評価されるのは、文章を通じての雑誌『聖化』を単独で発行してきたことであろう。和漢洋の古典に通じた深遠な学識を、キリスト教という信仰に凝結した信念を説教という方法論でなく、文章として客観化し、普遍化する手段をとった。このことは内村鑑三の個人主宰誌『聖書之研究』や安中教会の非戦主義者柏木義円牧師の『上毛教界月報』と軌を一にするものである。そのはじめは伊勢崎教会時代に『神の国』という誌名ではじめられた。一九一六年に甘楽教会に移り、これを二七年に『聖化』と改題した。彼はキリスト教者としての立場から、自由と平和と愛をこの小雑誌に執筆し、編集し、配布した。

日清戦争のときすでに非戦と平和を説いたが、日露戦争にはあらゆる周囲の批判の中に敢然として筆をまげなかった。「いま一人の内村鑑三」と評されるように、天性のキリスト教徒の面目が各号に躍動している。ことに一九三二年の満州事変以降の日本の軍国主義化の流れの中で憂国警世を訴えつづけ、特高警察から尾行をつけられる中でも貫いた。しかし一九三九年、一四九号をもって発行停止せざるを得なかった。全冊揃っては地元群馬県でも見られなかったが、今回不二出版でほぼ完全の形で復刻されることになり、今後の活用が期待され、同時に偉大なキリスト者の真の姿が再認識される契機となるためにも、多くの人びとに一読をすすめたい。

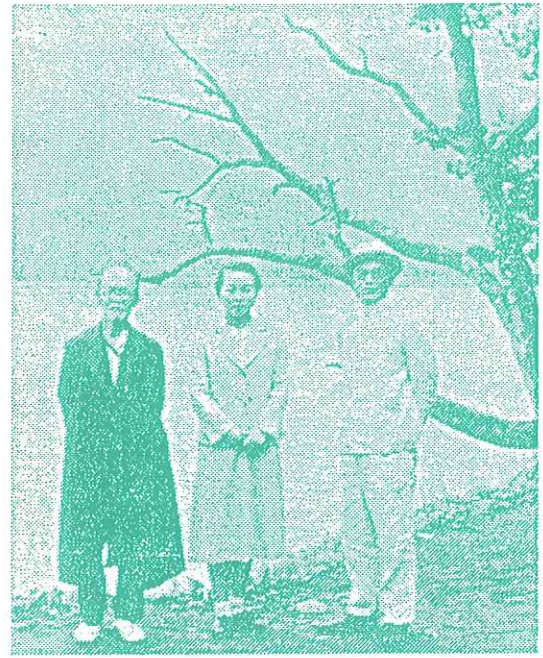
(はぎわら・すすむ 群馬県史専門委員長)



榛名湖畔に立つ天来(左端)

# 戦前の平和雑誌 復刻

横名湖畔に立つ晩年の住谷天来 (左端)



第二次大戦前、権力と軍国主義に逆立ち向かった群馬郡出身の宗教家住谷天来(一八六九—一九四四)が非戦、平和思想を訴えた雑誌『聖化』(全百四十九号)の復刻版が東京の出版社から刊行された。昭和初めの一九二七年から十二年間、政府の弾圧を受けながらも、鋭い批判を続けた『聖化』を見れば、当時の民衆思想やキリスト教の置かれた立場などがよく分り、近代思想史の貴重な資料、と歴史家には評価されている。

## 住谷天来の「聖化」

天来は群馬郡田村(現群馬 礼を受けた政治家湯浅治郎らと 一月十日号から月刊「聖化」を町)の農家に生まれた。地元( )ともに群馬の公娼( )を無料で発行を始めた。タフプロイ小学校を卒業後、独学を続け、止運動の先頭に立ち、全国に先( )判、四一六。天来のほか、一八九〇年、慶応義塾に入学。がけ、廃止を実現させた。内村( )番目の姿、朝江さん、前橋、福沢諭吉の思想やキリスト教新( )を編み、三三三が晩年、甘葉の教会指導者が寄稿し、毎月( )の中で、日清、日露戦争、満州事変などを日本の優( )行部数は毎月五百—千部程度( )のさやかなものだった。天来は著書「研究十年」を贈る( )余が主筆の( )のさやかなものだった。友を住谷天来君に贈る」と題する。費用は信者からの寄付でま( )会」という青年団体にも加わ( )名を記している。り、「前橋英和女学校」(現英 一九一八年から富岡の甘葉教( )「( )野」に立ち上( )と( )と批判した。軍国主義の支配については、

## 弾圧の中 鋭い批判 キリスト教思想訴える

百十四号(一九三六年六月)の中で「永久平和の基は、無私の愛と無私の仁と正義の道を実現する、柔和忍辱の聖業である」とを知らぬものである」と述べ、たとえ国家の命令に反しても戦争を憎み、人々をいっくみ、いっくみな信仰心を持ち続けるよう、訴えた。『聖化』の主張について、警察当局は「単に有害であり、無益であるのみならず、いわゆる『危険思想』である」と、廃刊を迫った。しばしば発売禁止処分を受けたが、天来は最後まで主張を変えず、三九年六月五日号で、「生活にも窮して、罰金を課せられても払うべき金もないからやむなく」廃刊とした。戦時中、失業者のうちに高崎市で世を去る。郷土史家の萩原進氏は「天来はあらゆる周囲の攻撃の中で、敢然とけり、筆を曲げず、平和と愛の普及をこの小雑誌に託し続けた。雑誌はほとんど散逸しており、戦時下の数少ない抵抗の記録として、また、天来の真の姿を再認識するための貴重な資料となる」と話している。復刻版の発行は、東京都文京区向丘一( )二、不二出版( )〇三三三八二二四四三( )三。日( )判、全三巻、七百七十六号で三万六千円。目次と解説だけを収めた約百頁の別冊は千円で分売もしている。



太平洋戦争勃発五十年。今年後半世紀前の危機の時代の平和の言論が、中東危機とのかねあいで、多面的に論じられていくだろう。そうした矢先、十年またに猪掘し、放ったらかしていた『聖化』という新聞の復刻の機会をえた。同紙の言論軌跡はファンズムと戦争の時代、独立不羈の思想家でありつづけた土着のキリスト者住谷天来の抵抗と挫折が、歴史のなかでどういう意味をもち、現

## 危機の時代の非戦のシャーマニズム

### 「聖化」の復刻に寄せて

門奈 直樹



もんな・なおき 立教 大教授 ジャーナリズム 論 一九九二年、静岡 歴史」など。

『聖化』が歴史の地平にあらわれるのはいったい、いつ、どこで、誰が、何を、どうして、か、と、問うた。それは、たゞの復刻版(全巻)を、待たない。『聖化』復刻版(全巻)は、不二出版刊。

代に何を語りかけているか、それを考える契機になると思われるので、ここに紹介したい。彼は言う。

「今日のよびは、国家と国民が滅亡に瀕しつつあるとき、その時こそ黙しておるときではなく、むしろ大声叱咤して大に語るべき時ではないか。何故に世の識者や達人や此際に出で、曠野に出で街頭に出で、忌憚なく大胆に語るべきなのであるか(『聖化』一三五号) 日本論者が、いな、キリスト者がインテリゲンチヤとして、宗教家として、自己の責任

を問うことな、国家権力を追いつたとき、独り天来はこうした時代傾向に反対した。批判精神の衰退が指摘される昨今、『聖化』がよみがえる理由がそこにある。それは彼の言論がいまわしい時代にあるから、そこから決して身をすらすらに生きぬいた闘いの言論であったことも関連しよう。

持法を大学を追われた経済学者任谷悦治、ロシアに渡り、消息を断つた反骨の言論人大庭桐公等の名前が垣間みられる。彼らはいずれも、わが身にふりかかる難題を、民族の破滅、国家の滅亡とらえたが、天来はこうした憂国の民たちの支援を受けて、次のようにも言うのである。

「おまをいかなる戦争にもせよ、自国を守るためと名のもとで行われようとも、これを義とすることはできない。ましてや現実と迫っている戦争の徴候は正義の名のもとにあるではないか。たゞ、正義のためにやむなく応戦したとしても、「いやしがたき禍根が残る」(五九号)。禍根が残る以上、戦争の絶対否定の思想をつくり、「平和の要望を絶叫せねばならぬ」(九六号)。

を、「所詮、危険思想」と言い、同紙の廃刊を命じた。「世を震えるもの、おそろしく論じたいものはない」(一四七号)。天来はそう慨嘆するが、もはや、なすすべもなかった。一九三九年のことであり、それから五年後、彼は昇天する。そして、五十年近くが経過した。折しも、湾岸危機に直面して、自衛隊の海外派遣を策する言論が、たゞは、憲法に反して「国際の貢献」の名のもと、振頭したが、こういう言論が世界のなかの日本の立場についての冷静な判断をいかに困難なものにしていくか、察するにあたり



復刻された『聖化』の紙面

馬具に生まれた。青年期、娼娼運動に参加。その関係で、植木枝盛や島田三郎らとともに地域啓蒙媒体の「上毛之青年」の寄稿者として名をつらねる。同郷のキリスト者内村鑑三との親交はつとに有名。ここに、鑑三主宰の『聖書研究』に寄せた「墨子の非戦主義」は天来の最初の非戦論として、日露戦争時、多くの共感者をえた。『平

平和・非戦論を戦時体制下に披瀝し、それを実践していくためのキリスト者としての責務であった、と考えられる。 創刊は一九二七年だった。タフプロイ判六頁、月刊の文字通りさやかな伝道新聞ではあったが、寄稿者は多士濟々。たとえば、満州事変を不義罪悪だとみて、弾圧された金沢常雄、同時代、治安維

う口実のものに始められぬものなのを思えば、自衛権即侵略のための戦争とならぬと誰が保障できるか……武装をもって保障されている平和がい、アテにならぬものはないからです」(二七号) 彼の非戦論は戦争を原理的に否定していく絶対的非戦主義の立場にあった。また、そ

そう言うって、天来は「軍国主義の再来(七四号)」、「日本の危機」(八二号)、「狂乱の世界」(一一三号)、「世界の戦場」(一二九号)等々の見出しを掲げ、危機の時代の人の世の生き方を追求し、その危機の克服に意欲を燃やす精神の高まりを訴える。が、官憲はみすまさない。

『聖化』復刻版(全巻)は、不二出版刊。

# 『聖化』

復刻版概要 1990年11月刊行済

全2巻・別冊1〈全149号を合本・一九二七年一月〜一九三九年六月〉

B5判・上製・総776ページ

別冊―解説〈門奈直樹〉・総目次・索引

本体揃価格 396,000円

〈別冊のみ分売可―1,000円〉

序―住谷一彦 〈東京国際大学教授〉

推薦―杉井六郎

鈴木範久

萩原 進

## 関連図書のご案内

柏木義円主宰

『上毛教界月報』復刻版全11巻・別冊1

柏木義円主宰

A4・B5判・上製函入・総6,200ページ

別冊―解説〈武邦保〉・総目次・索引

本体揃価格 188,000円

〈別冊のみ分売可―3,000円〉



現在の甘楽教会

○弊社は注文制です。  
お近くの書店へご注文ください。  
○本カタログ中の表示価格は、  
全て消費税を含んでおりません。

群馬県安中教会の牧師・柏木義円が一八九八(明治31)年に創刊し、一九三六(昭和11)年まで刊行され続けた本誌は、戦前の帝国主義体制下にあつて臣民教育や政府の宗教政策に真向から反対し果敢な国家批判を行なった。住谷天来も寄稿。

## 不二出版

東京都文京区向丘一―二―一二  
TEL 〇三(三八一)二四四三三  
FAX 〇三(三八一)二四四六四  
振替 〇東京 六一九四〇八四